

主題：戦後再開された「関西盲婦人ホーム」

ー越岡ふみとその後ー

○ 関西学院大学大学院研究員 森田昭二 (会員番号 007426)

キーワード3つ：関西盲婦人ホーム、関西盲人ホーム、越岡ふみ

1. 研究目的

明治政府によって盲人の互助組織であった当道座が廃止されて以後、盲人の生活は貧窮の度合いを深めた。なかでも盲女子の境遇は、男女差別によってさらに悲惨をきわめた。貧窮に苦しむ盲女子が就く唯一の職業は、按摩師であったが、しかし、その職場は性の危険に曝され、その師である町の按摩師のもとには男女が雑魚寝をするという猥雑な環境が強いられたのである。

こうした境遇から盲学校を出たばかりの若い盲女子を救おうとして二人の女性が立ち上がった。一人は、1936年に作られた「陽光会ホーム」の斉藤百合であり、もう一人は、1935年にできた「関西盲婦人ホーム」の越岡ふみである。ともに当事者として盲女子の保護と自立更生のための施設を立ち上げ、キリスト教主義による精神修養と職業教育を通して自立した社会人としての地位の向上を目指したのである。

本研究は、越岡ふみを取り上げ、特に戦後再開された「関西盲婦人ホーム」を重点的に見ていくことにした。合わせて越岡ふみ没後の「関西盲人ホーム」の実態についても明らかにすることを試みる。そして、この施設の果たした役割と、今後に残している課題について考察する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、時代の推移とともに、制度や状況が変化するなかで設立当時の趣旨がどう生かされてきたかに視点をおきながらまとめようとするものである。

なお方法は、歴史研究であるので、主に資料の検討を通して行った。

3. 倫理的配慮

役員や職員の氏名は明記したが、利用者の氏名は秘密保持の上から一切記すことはしなかった。発表に際しては、施設の了解は得ている。

なお、本研究は歴史的研究であるので、当時一般的に使用されていた「盲人」の語を使用している。

4. 研究結果

創立者の精神であるキリスト教の愛と信仰に基づいて、豊かな品性と教養を身につけ、鍼やマッサージの治療によって自立した盲女子を社会に送り出す使命をもった「関西盲人ホーム」は、戦後再開されて以後、時代のさまざまな情勢の変化にもかかわらずその使命を十分に果してきたのであるが、現在その存続が危ぶまれる状態にまで立ち至っている。改めて、盲女子のみのホームの維持の困難さを本研究としては直視することになる。それは、三療の国家試験に合格する者が減っていることや重複障害をもつ人が増えてきていることなどから、施設の利用者数が減り、ホームの運営をむずかしくしていることによる。

一方「関西盲人ホーム」は、ホームの存続をかけて地域と密着した生活相談の面でその役割を果そうとしている。中高年の中途失明者への生活相談事業（白杖歩行や点字の読み書き、音声ガイド付きパソコンの操作など）であったり、各種の視覚障害者への支援のためのアンケート調査などにその取り組みが見られる。こうした試みにもかかわらず、施設開始当時の使命が、実践していく上で、危うくなっている現状があることは認めざるを得ない

5. 考察

盲人ホームが運営困難になっている理由として次のようなものが考えられる。①経営状況が厳しく、赤字運営となっている ②利用者定員が20名以上を下回っており、利用者確保が困難な状況にある。また、利用者の年齢、経歴などが幅広く、利用者像が多様である ③盲人ホーム利用者の利用期間が長期化しているといったものである。この課題の克服とその将来像であるが、模索中であり、いまだその解決は得られていないのが実情である。

「関西盲人ホーム」の歴史は、創設当時の使命を受け継ぎ、盲女子の自立更生の施設として、よくその役割を果たしてきた。この施設は、盲女子の施設としては今では唯一のものとなっている。しかし、現状はその存続が危ぶまれる課題に逢着している。